第1回指導主事・社会教育主事会 教育長講話（令和7年4月21日）

皆さん、おはようございます。教育長の野津です。どうぞよろしくお願ひいたします。

指導主事、社会教育主事の皆さん方には、日頃より子どもたちの教育、健やかな成長、また学校現場をしっかりとバックアップしていただき、ご努力されていること、奮闘されていることに、まずもって御礼を申し上げます。

ありがとうございます。

また、地域との繋がり、あるいは社会との繋がり、こういったところにも取り組んでいただき、島根の教育の特徴であります人との関わりを大切にする教育、そこから直接学ぶ教育、こういったものに対して、しっかりとその役割を果たしていただいておりますことを感謝申し上げます。

ありがとうございます。

昨年度、新しい教育振興計画、県の教育委員会としての最上位計画である教育振興ビジョンを策定いたしました。今年度から5か年の計画であります。

従来、教育魅力化ビジョンと言っていたものを、タイトルを変え、中身を更新したところでもあります。

「魅力化」という言葉をビジョンからあえて落としました。

1つには、言葉というのは、誰もが同じ意味を受け取るということが大事。特に、こういった象徴的な計画の名前は、教育魅力化といったときに受け取る方が様々な想像を働かせ、これはこれで結構ですが、広がったものがまとまらないと計画としてうまくいかない。なので、あえて落としました。

もう1つは、これから魅力化しようということではなく、これまで現場でたくさん魅力化に向けて取り組んでいただいたという意味です。

「化」というのは、そこへ移すという、そこを目的としてゴールしていく、そういった言葉なので、ある程度できているのではないかということで、魅力化、「化」から次のステップだろうということで、そうすると魅力ビジョンというのも変なので、そういった2つの意味で、シンプルにしました。

もちろん中身もできるだけわかりやすくということ、誰が読んでも同じようにとらえることができるような言葉にできる限りしたところでもあります。

3月末のぎりぎりまで中身を詰めましたので、まだ冊子はできておりませんが、既にホームページには全部が掲載されておりますので、またご覧いただければと思います。

その中で、基本目標があって、つけたい力がある。これは基本的にはそんなに変わってはいません。

少し言葉をリバイスしたというか、今どきに変えたという、新しさをだすために変えたところですが、それとは別に、実際に我々県教委の事業として取り組みたいところである4つの柱を作って、そのうちの2つ、1つ目が発達の段階に応じた学力の育成であります。そしてもう1つが、教育上の配慮が必要な子どもの学びへの支援。この2つを私は特に、大事にしたい、力を入れたい。この5年間、島根の教育で校種を

問わず力を入れたいと思っております。

同じように、県全体の一番大きな最上位の計画である島根創生計画、これが第二期になります。第2期島根創生計画は、中身を充実させて期を移したということで、名前を変えず、第2期という言い方になっております。

島根創生計画は、働く環境をつくる。結婚、子育ての環境をつくる。地域をつくる。人をつくる。この4本柱が大きな計画です。

そのうちの結婚、子育て支援、この中の子育て支援の中に、先ほど言いました2つ、発達の段階に応じた学力の育成と、配慮の必要な子どもたちへの支援が、本文に入っています。

ということはどういうことかというと、子育てをする際に、親御さんが不安に思う要素、たくさんありますよね、保育期には保育所に入れるだろうかとか、子ども医療費がかかるんじゃないかとか、そういったたくさん不安がおありになる中で、その中の1つに、学校での不安、お子さんが小学校に上がって、社会に出るまでのこの間の不安に、大きく2つあるだろう。それが、学力が十分について社会に出て自立できるのか、あるいは、不登校でありますとか発達障がいがありますとか様々な事情を抱えたお子さんがきちんと社会に出て自立できるとか、そういったことの不安を、県としても解消しようということで、県の知事の計画に子育て支援が載ったということでもあります。

当然、教育振興ビジョンも最上位の島根創生計画の下につきますので、その2つをしっかり受け継いで、ビジョンの大きな柱としたところでもあります。

本当は逆で、我々がこれをしたいので載せてくださいとお願いをして、そうだといいことで載せてもらったというのは、事務手続上はそうなんですけども、でき上がったものからいうと、県の全体の中で、そこをしっかりやって、定住、あるいは県民生活をもっと良くしていこう。人をたくさん増やすよう産業振興しよう。住民の方が豊かに生きていこうと、こうといった中に、親御さんたちの子育て不安、教育上の不安を解消しようということが明記されました。

本当は、これまでも当然、その役割としてはあったことで何ら変わってないのですが、やはり県の大きな計画にそれが書き込まれたということは、それを実際にやっていく我々、公務員や教育公務員の方々、教育に携わるの方々にとっては大きな意味があると思います。

そして、書いてもう1つ良かったことは、そのための予算が、割とたくさんついたということです。スタッフがいろいろ頑張ってくれまして、配慮の必要なお子さんへの支援、あるいは学習障がいについて調査したり、それを支援したり、根本的なところですよ。あるいは、たつじんテストをやる。あるいは小学校の算数で分数がきちんとわかる。ここへ注力しようとかですね。あるいは、不登校について校内教育支援センターの配置の補助を県もしっかり出そうとか。あるいは宍道高校、色々な方の受け入れがきちんとできるよう校舎を新しく建てることも含めてですね、教員を増やして、そういった高校段階での支援を行おう。あるいは高校生の学力育成、さらに校長裁量経費の予算を付けて、各学校の特色ある教育を伸ばそう、こういったことにより予算をつけていただきました。

1つ大きな方針として、そういったことが、知事、あるいは知事部局、他の部長等も含めて、我々と一致した思いになって進めていく体制ができました。

個々の事業については、また個別に説明がおいおいあると思いますが、大きな流れとして、そういったベースのスタートラインが、県庁を挙げての政策になったということ、ぜひ皆さん覚えておいていただきたい。

そういった中で、現場で一つひとつ、あるいは一人ひとりがどうやっていくのかというところを、ぜひ皆さん工夫して、皆さんのこれまでのキャリアを生かして、あるいは多くの仲間の知恵を借りて、現場で伝えていただければと思っています。

新しいこともありますので、現場で取組のご負担があるかもしれません。今日100点を取る必要はない。10点、20点からスタートして、おいおい60点、70点になっていけばいい。焦らずに、取り組んでいただきたい。新しいものが来た、ああしんどい。最初から100点ねらうと、非常にしんどい。皆さん自身がしんどい思いをされるし、実際に皆さんと関わる現場の教員も、受けとめきれないだろうと思います。最初は、スタートラインをみんなで確認し合う。それで、少しずつ少しずつ、やっていこうと皆さんが思っただけであれば、負担にならない。皆さんが壊れてはいけませんからね。そういうふうに、100点をねらわずに、本当に10点からで結構ですので、じゃあ次は20点だろう、30点だろうという形でやっていくことで皆さん自身にもノウハウが蓄積し、周りの理解も得ることができ、そして仲間たちの知恵も集まってくる。おそらく、やっていくと加速的に良くなっていくのではないかと思います。その点は、皆さんの腕にかかっている、気持ちにかかっている面がたくさんございます。何卒ご理解のうえ、ご協力、ご指導のほどお願いしたいと思います。

私が県庁に入ったのが、もう40年以上、41年前ですかね。昭和59年に県庁に入ったのですが、若い頃は、ただのやんちゃ坊主だったのですが、だんだん責任がある仕事を任されるにあたって、自分の考え方であるとか、一緒に働いてくれるスタッフの方への仕事の仕方というか、メッセージといいますか、方針といいますか、そういったものが少しずつ自分のキャリアの中でまとまってきて、それを今、実際一緒に働いているスタッフの方にはもう8年ぐらい同じ話をしているのですが、少しそのお話をさせていただきたいと思います。

私の仕事、そして私がスタッフに求めている仕事のやり方というのは、「県民の方の生活に、普段の動きのない動きを作ろう。」。これまでと少し変えよう。県民の方の生活、皆さん一緒に働いているスタッフ、皆さんも含めて、皆さんがどう動くかではなくて、その結果県民の方の生活がどう変わるのか。少しでも変える。いい方へ変えよう。そういう意識をもちましょうということです。

我々、学校教育に携わる者は、基本的に公僕ですから、公務員ですから、その一番大事なことは県民生活を変えることです。もちろん良い方向へ、それはさっき言いました100点を最初から目指す必要なくて少しでもいいから変える。これをキャッチフレーズ的に言うと、県民の方の生活に少しでも動きを起こさせようということで、生活の「活」と「動き」として「活動を起こせ」というフレーズを使っています。

「活動を起こせ」、皆さんに私が言うのは、活動を起こせ、活動を起こしてください。こういう言い方をします。それは何かというと県民の方の生活に、動きを、変化

を起こそう。これを常に意識していただきたい。皆さんだと例えば、現場に行って教員の動きを変える。今やっておられますよね。そこでは駄目なんですね。教員は仲間ですから。お子さん、児童生徒、保護者の方、あるいは地域の方々、そういった方の生活を少し変えていく。そういう視点をもって一緒に頑張る現場の教員の方、あるいは社会教育主事の方、現場で頑張っている公民館の方、地域リーダーの方と接して、その先をねらおうと。

これが、私がこの役人人生の中でたどり着いたフレーズであり、忘れずに、みんなで意識して欲しいことであります。

そのために皆さんにつけていただきたい力が、5つある。現場をよく見る。見る力ですよね。現場をよく見る、見る力。多くの人の話を聞く、聞く力ですよね。多くの人の話を聞く、聞く力。そして、そのデータ、情報をもって柔軟に考える力、考える力、柔軟に考える力。そして、考えたものを人にわかりやすく説明する力、説明する力、人にわかりやすく説明する力。そして、合意を得たものを、成果があるように実行する力、実行力です。ここで初めて実行力。合意を得たものを、成果が出るように、実行する力。

この見る力、聞く力、考える力、説明する力、実行する力のこの5つを備えると実践する力というのができます。実践力。私は、実践力の中身はこの5つの要素だと思っています。

先ほど言いましたよね。現場が変わらなきゃ。変えるために我々は一生懸命働く。その実践する力の要素が先ほど言った、見る力など5つの力だと私は思っています。一つひとつステップがあります。いきなり実行できませんよね。我々は多くの人の同意を得ないと、そのためには説明しなきゃいけない、そのためには、いいものを考えないといけない、考えるためには、現場をよく知らないといけない、自分1人では、考えられない、多くの人から話を聞いたり、多くの人がやっていることを見たり、こういう5つの力で実践をしていく。

先ほど申し上げた新しい教育ビジョンはかなり分厚いので、また読んでいただきたいと思えます。じっくり読んでいただきたいと思えます。基本目標やつけたい力が書いてあります。そういった一つひとつをどうやっていくのかということとは先ほど言った5つの段階を踏み、5つの力を、みんなで寄せ集めてやろうじゃありませんかという話を毎年、もう同じ話を8年ぐらいやっています。教育長になって、4月1日を迎えるのは4回目です。前職、県の政策企画局長をやっていた時代と合わせると8年になりますけど、一貫してぶれずに同じことを言っている。毎年同じ話を聞いている人もたくさんいますけども、ぶれてない。変わらないってことはおそらくぶれてない。こういう職になってたくさんの方にこの話をして、いろいろご意見いただくこともありますけれども、そういっても変わらないのはぶれていないのだろうなど。

もう1つは、ある程度多くの方に納得して実践していただいているのだろうなど思っています。なので今日はあえてこの話をさせていただきました。

新しいビジョンをやっていく上で、皆さんにぜひ何て言いますかね。ここで、使命感とか何とかってあまり使わない、こういうときに使わないですね、結果なので。そこはね、取り組むに当たってのお話をさせていただきました。

その上で、結果と言いましたけども、やっていく過程で、やはり皆さんも、少しずつ相手の理解が進んでくると高揚感が出ますよね。高揚感が出て、ある程度自分の思っていた通りにいくと満足する。達成感があって満足する。人間満足するとよくないのは、必ず欲が出る。達成感満足とほぼイコールですけど、達成感であり欲はでませんが、満足で欲は出る。そうするともう少し頑張りたい。もう少し上に行きたい。もう少し多くの人にやりたい。そうするとそこで、もう1回学びが入ってくる。皆さん自身に学びが入ってくる。努力して向上心が生まれて、またもうワンステップ上に上がる。そういったサイクル、これは幾つになっても、子どもだけじゃなくて大人になっても100になっても、もう100歳になっても必要な学びのサイクルだと思います。そこをぜひ意識し、そういう達成感、何か向上心とかあると楽しいですよ。もちろん辛いことたくさんありますけど。そこで、頑張ろう、何かいいな、つらいけど、いや、やりたいなという、自分の心の中で自転をしていく。こういったことを毎日意識する必要はないので、どこかで振り返ったときに、そのステップ、サイクルを思い起こしていただければ、何かやったなと思ったときに振り返る。なんでやろうと思ったのか。これ仕事だからっていうのはあるかもしれない。ただスタートラインはそうでも、なんでそれで努力したのか、どういう努力したのか、どこまでどうなったから自分が達成感を感じたのか、その目標と現実の中で、どの程度だったら達成感を感じたのか、そこで満足したのか、満足せずに、人間、欲があります。満足せずにもうちょっとって思った。思ったときに何をしたのか、もう1回学び直した、人に聞いたとかありますよね。そういったことを、もうちょっとやろうと、そこで思ったとか、そういう振り返りをどこかでやって欲しい。年に1回でもいいですよ。別に半期に1回でも、別に期間決めずにやってもいいですけど、何かやった、よかったって思ったときに必ず振り返りをして、自分の中の、学びのサイクルを確認して欲しいです。そのことによって次やるときにもっと、効率的に、あるいは効果的に、学びのサイクルが回っていくのではないのでしょうか。

そして、もう1つはそうやって確認した人は、若い方に教えていける、学びのサイクルを教えていける。あくまでも学びのサイクルって基本的には自己完結。でもどこかでアシストしてあげないと。最初、背中押してあげる。前に進める。1歩進まなきゃいけないよって言ってあげるとか、このとき、ここへ戻ったらというようなことをアシストするということは、経験の少ない若い人にとって、とても大事だと思います。こういったときに、皆さんはもうそういった人生教育も、教科の教育だけでなく人生教育も十分おできになるキャリアをお持ちの方だと思います。ただ、意識して、そこを若い方にしてあげて欲しい。そういった声掛けの1つによって、自分が教員でいる存在感というものを意識して、教員として引き続き力を発揮していただくことができるのではないかと。そういう、きっかけになると思っています。

正解なんてない。誰も人のことはわからないし、特に若い人の方なんかよくわからないけども、その存在を認めてあげる。

私は、4月1日の新規採用職員の辞令交付の際は、最初式辞を読む前に必ず言うんですよね。まず、「おはようございます」とか、「こんにちは」。「皆様おはようございます」「こんにちは」と。その時の返事ってやっぱり若い人って、どう返事して

いいのかどうなのかがわかりませんよね。一対多で、県民会館の座席に座っていて、こういったところ、わからないけど、必ず言ってあげるのは、「挨拶難しいよね。こういう時どうしてわかんないけど、でも挨拶は簡単なんだよ。すればいいんだよ。」という話から、挨拶をするということ、特に呼びかけて挨拶ということは相手の存在を既に認めて、これから対話関係に入ると。人間関係を作り上げるよ。今日も今から作り上げるよという。相手の存在を認めた。一番わかりやすい形ですよ。そういう具合に、存在を認めてあげることが、若い人にとってとても大事。非常に不安定な状況にある今の若い人たち、凶太くないので、凶太い人も一部いますが、割と総じて、穏やかに生きてきた方で、我々は皆さんも今どきの若いもんはっていう常にある言葉に象徴されるような方が多いですけど、そういったときに大事なものは、まず、存在を認め、これ、子どもたちにとっても一緒ですよ。同じことをやっておられると思いますけども、そういったことで、若い方を、若い教員の方、あるいは現場のいろいろ地域の方も含めて存在を認めて、人生の学びのサイクルを突っ込んで、誰一人欠けることなく島根の教育を進めていけたらと思っております。

何卒、この1年、皆さん、様々な方面でご活躍いただくようになると思います。どうぞよろしく願いいたします。